

〈特別講演会〉

ポーランド・アイヌ・北海道
交流の歴史から

ブロニスワフ・

ピウスツキの遺したもの

2023 3/4 (土) 18:30~20:30

札幌エルプラザ
4F 大研修室 (北8西3)

昨年暮れブロニスワフ・ピウスツキの孫、木村和保氏が亡くなりました。また、今年は没後 105 年、旧ポロトコタンにピウスツキ記念像が建立されてから十年になります。

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)は、樺太に流謫され 19 年の歳月を極東で過ごしアイヌ・ニブフ・ウイльтаなど極東先住民研究に従事し、この分野では草分けと評価されています。1980 年代半ばに北海道大学がピウスツキの収録した蠟管の音声復元に成功し、「アイヌ民族の最古の肉声」の復元が話題になりました。

二人の講師をお迎えし、このポーランドの優れた民族学者の遺したものについて考えます。

講演 I

ブロニスワフ・ピウスツキが
集めたアイヌの衣類
佐々木史郎
(国立アイヌ民族博物館)

講演 II

ピウスツキが来たころと、
その後の樺太アイヌの歩み
田村将人
(国立アイヌ民族博物館)

どなたもご参加いただけます。入場無料、定員 60 人、先着順 (予約推奨)、開場 18:00

お問合せ・予約先: hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956 (安藤)

感染対策 (マスク着用、手指消毒) をお願いします。会場内の撮影は主催者に限ります。

(謝辞) この度、株式会社三菱 UFJ 銀行様から (同行札幌支店とは別に) 銀行本部の社会貢献活動の一環として実施される『役職員自身が企画実施する社会貢献活動』の取組みの一つとして、弊会の活動に対し 50 万円のご寄付があり、その一部を当講演会に活用させて頂くことになりました。篤く御礼申し上げます。当日は寄付金贈呈式が予定されています。

=表上図= アイヌ衣装を着たプロニスワフ・ピウスツキ、絵 アドマス・ヴァルナス 1912、ユゼフ・ピウスツキ博物館蔵
=表左下&裏中左 図= 紙芝居「遠い遠い東の国で有名になったプロニシ・ピウスツキ」より、絵 パウリナ・パジチエラ

講演 I

プロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類

佐々木史郎 (国立アイヌ民族博物館 館長)



プロニスワフ・ピウスツキはサハリン滞在中や北海道調査で多数のアイヌ民族関連の資料を収集しています。その中には衣類や繊維製品がかなりの量で含まれていますが、それらには当時の優れた織り、編み、縫製、刺繍の技術と美的センスが輝いています。 Санктペテルブルク、ユジノサハリンスク、ウラジオストクなどの博物館に収蔵されているピウスツキ収集の資料を紹介しながら、それらの資料をアイヌの文化復興にいかに関与すべきかについて考えます。

講演 II



ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み

田村将人 (国立アイヌ民族博物館 資料情報室長)





1902~05年、ピウスツキはロシア帝室科学アカデミーの委嘱によりサハリン南部でアイヌの村落を訪ねて言語や文化の調査を行い、多くの成果を残しました。1905年ポーツマス条約によってサハリン南部が日本領となり、樺太アイヌは日本国民となり、1945年以降ほとんどが北海道へ移住しました。ピウスツキが残した資料とともに、樺太アイヌがたどった20世紀前半の歴史と社会状況についても考えます。

○アフタートーク(感想、質疑応答など)



プロニスワフ・ピウスツキ記念像
除幕式、旧ポロトコタン 2013.10
←右から→ C.コザチェフスキ
駐日ポーランド共和国大使(当時)
安藤厚 本会会長
←左から→ 故木村和保氏
W.コヴァルスキ氏
(プロニスワフの末妹の孫)
J.ロドヴィッチ
元駐日ポーランド共和国大使



B.ピウスツキ没後百年記念講演
と映画と朗読の集い 2018.7

<http://hdl.handle.net/2115/53543>

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLBS8QnZswkMnO7ev-Ctibp-ITd0NzMoAS>



B.ピウスツキ百年忌
旧ポロトコタン 2018.5



二風谷アイヌ文化博物館特別展「1903年夏の平取〜
B・ピウスツキたちの短期調査より」 移動展 2020.7



B.ピウスツキ 104 年忌、ウポポイ 2022.5
←左から>野本正博 文化振興部長、安藤会長
井上紘一 北大名誉教授、佐々木史郎 館長



1903年夏の平取
B・ピウスツキたちの短期調査より
7月18日 7月26日
9時45分 12時45分



写真提供 (上段) 北海道ポーランド文化協会 (下段) ウポポイ・野本正博氏

ブロニスワフ・ピウスツキが集めた アイヌの衣類

佐々木史郎
国立アイヌ民族博物館

1

本講演のねらい

- ブロニスワフ・ピウスツキは、サハリン（樺太）と北海道、そして大陸側のアムール川流域などで民族調査を行いました。
- そのとき、最新鋭の蝸管録音機と写真機を持ち込み、人々の声を録音し、姿をガラス乾板に写しました。
- それと同時に彼は、膨大な量の実物資料を集め、ロシア各地の博物館に納めました。それらはサンクトペテルブルク（クンストカーメラ）、ウラジオストーク（沿海地方郷土博物館）、ユジノサハリンスク（サハリン郷土博物館）などにある博物館に分散して収蔵されていますが、その一部はヨーロッパの博物館（例えばライブツィヒの民族学博物館など）にも入っています。
- 本講演ではそれらの実物資料のうち、アイヌの衣類とその周辺資料についてお話ししたいと思います。
- これは私が実施した2つの科研プロジェクト（「北方寒冷地における織布技術と布の機能」2014年度～2016年度と「アイヌ民族の衣文化交流」2017年度～2019年度）の研究成果の一部です。

2

科研での衣類調査の目的と選定方針

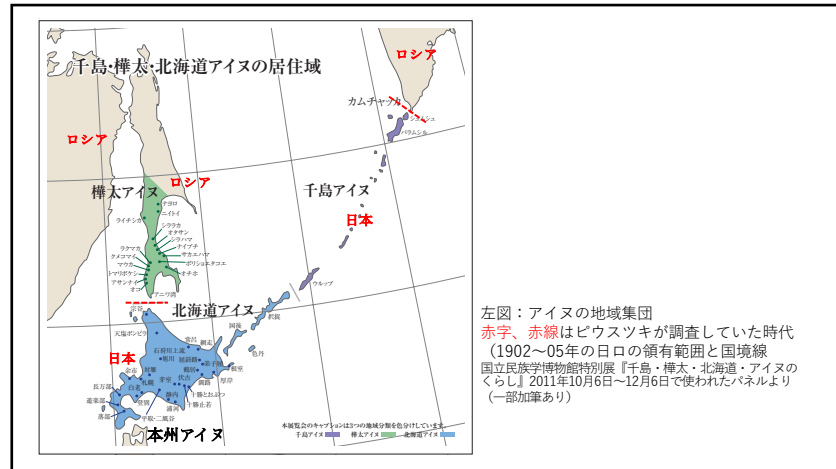
- 6年続けた科研調査の目的は、あまり研究されていないユーラシア北方地域の織布文化と織物の機能を明らかにすることで、後半はそれをアイヌに絞った形で実施しました。
- 織布文化とは独自の織機を使って、独自の織物をつくる文化です。またそのような文化を持つ民族が他地域から輸入した布類をどのように活用したのかにも着目しました。
- 調査資料は主にロシアの博物館に収蔵されている織布文化を持つユーラシア北方民族の衣類、繊維製品でした。織布文化をもつ北方民族には、ハンディ、タタール、ブリヤート、そしてアイヌがいて、調査対象もそのような民族の資料にしました。
- そのように設定した調査対象の中に、ブロニスワフ・ピウスツキが収集したアイヌ関連の資料が少なからずありました。この講演ではそのような資料のいくつかを紹介します。

3

ピウスツキが収集したアイヌ資料コレクション

- ピウスツキはサハリンと北海道で精力的にアイヌ関連の資料を収集した。そのうち、ロシア国内の博物館に収蔵されているコレクションは以下の通り
- クンストカーメラ（『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』1998年による）
 - 700番台（台帳記載年1903、推定収集年1902-05、収集地：サハリン）
 - 829番台（台帳記載年1906、推定収集年1902-05、収集地：サハリン）
 - 837番台（台帳記載年1904、推定収集年1902-05、収集地：サハリン）
 - 839番台（台帳記載年1904、推定収集年1903、収集地：北海道）
 - 1039番台（台帳記載年1906、推定収集年1902-05、収集地：南サハリン）
 - 2803番台（台帳記載年1903、推定収集年1902-05、収集地：サハリン）
 - 3125番台（台帳記載年1914、推定収集年不明、収集地：サハリン）
- 沿海地方郷土博物館：904番台
- サハリン郷土博物館：沿海地方郷土博物館より移管された資料

4



5

科研で詳細調査を行ったピウスツキ収集のアイヌ衣類

- サハリンで収集した衣類
 - 沿海地方郷土博物館（ウラジオストック）：M П K 904-5
 - サハリン郷土博物館（ユジノサハリンスク）：1831、1859、1861、1856ab、1857、5188
 - クンストカーメラ（サントペテルブルク）：700-162、700-227a、700-235、700-300、829-373a, b、829-374、829-406、829-437
- 北海道で収集した衣類
 - クンストカーメラ（サントペテルブルク）：839-17、839-28a、839-86、839-184、839-195、839-199

6

ピウスツキの収集の歴史的背景

- ピウスツキが活発に資料収集を行った時代 = 1902年～1905年
- サハリンでは：
 - = 樺太千島交換条約（1875年）から30年がたった頃
 - = この30年間の帝政ロシア統治下の樺太アイヌの状況を加味する必要 + これらの収集品から当時の樺太アイヌの状況を推測することも可能
- 当時の帝政ロシアは先住民族統治に不熱心 ⇨ 流刑地 + 資源開発
 - = コミュニティへの干渉は少ないが、安全も保障されない
 - ⇨ 「異民族」（инородцы）として建前上「保護」の対象とされるが、事実上放置
 - ⇨ ピウスツキによる「識字学校」と「樺太アイヌ統治規定草案」の必要性
 - = 1850年代～80年代にシュレンク、ポリャーコフ、スプルネンコなどによる調査や民族資料収集も行われるが、まだ量的には多くはない。
- 1875年以前は幕末まで続いた幕府あるいは松前藩統治下の場所請負制度
 - ただし、ロシアと日本の二重統治下において、両者の力の均衡を巧みに利用したたかさも（シトクレランの一件など）
 - ⇨ ロシア進出以前の清と日本の二重統治時代の経験

7

8

- サハリンにおけるアイヌの人口
 - =1897年の第1回全ロシア国勢調査ではサハリン全島（南部の Колサコフ郡のみ）で55コタン、301世帯、1442人（男761人、女681人）が記録されている。
 - =東海岸では29コタン、143世帯、736人（男396人、女340人）
 - =西海岸では26コタン、158世帯、701人（男361人、女340人）
 - =アイヌのコタン以外のところに5人（男4人、女1人）
 - =アイヌコタンで暮らすロシア人155人（男126人、女29人）、同じく日本人83人（男81人、女2人）。コルサコフ郡全体ではロシア人5047人（男3752人、女1295人）、日本人218人（男208人、女10人）
 - c.f. その他アリューシャン列島のベーリング島とメードヌイ島に14人（男7人、女7人）の千島アイヌがいた。
- C. Патканов, *Статистические данные, показывающие племенной состав населения Сибири, язык и роды инородцев (из оснований данных специальной разработки материала переписи 1897 г.)*, Записки императорского русского географического общества по отделению статически. том XI, вып. 3. 1912. pp.990-994による

9

- 北海道では：
 - 北海道旧土人保護法施行（1899年）から3年～6年
 - 欧米からの調査者、旅行者、資料収集者などが北海道を盛んに訪れるようになってから30余年が経過
 - ←1860年代から70年代に北海道を訪れた初期の研究者、旅行家、資料収集者にはホーレス・ケブロン、ハインリッヒ・シーボルト、イザベラ・バード、ロミン・ヒッチコックなどがある
 - 1900年前後は欧米の博物館などによるアイヌ資料収集の最盛期（ピウスツキもその時代の研究者・収集者）
 - =明治維新後30年が経ち、政府の近代化政策や開拓民急増の影響がアイヌの生活や文化に顕著になってきた時代
 - 欧米のコレクターの収集傾向
 - =古い道具類（狩猟、漁撈、採集用具など）、衣類（特に上衣、手甲、脚絆、帽子、刀懸け帯など手の込んだ刺繍のあるもの）、工芸品（バスイやイタの他、舟や家の模型、「蝦夷土産」とも呼ばれた和人や外国人向けの工芸品）
 - =イナウなどの祭具（バスイは例外）、漆器や刀剣などのイコロは少ない
 - ピウスツキの収集にもその傾向が見て取れる

10

ピウスツキが収集した衣類関連資料の特徴

- 全体的に見て、より伝統的な技術や技法、デザインを用いながらも、その素材や技術の力量は現代のものを上回る
 - 例えば：a) 木綿衣にせよ靱皮衣にせよ縫製糸に靱皮繊維や動物の腱の糸が使われる。b) 装飾布や刺繍糸に絹布や絹糸、毛糸が使われる。c) 色使いが多彩。d) 織り、編み、刺繍の目がより細かく、詰まっている。e) 縫製がより丁寧で、丈夫である。
- 製作年代は、資料の劣化具合から見て（収蔵後は使用されないで劣化が進まないとして）、ピウスツキの時代より1世代か2世代前と推測される
 - =サハリンでは日ロ二重統治時代からロシア統治時代、北海道では幕末から明治前半、ともに1850年代～90年代ぐらいか？
- 近代化政策によって伝統技術、伝統的デザインが失われ、貧困化によって必要な高級素材の入手が困難になる前の時代、あるいは困難になりつつある時代に製作されたことが理由の1つとして考えられる。
 - cf. 近代に入ると大量生産によって安価になった素材（機械紡績、機械織の木綿や毛織物、レーヨンなど）が多く使われるようになる。
- その一方で、839-17（北海道収集）のように徹底的に補修して使い続けてきた衣類も見られる（サハリン収集のアザラン皮上衣700-162にも補修痕は見られる）

11

12

- ビウスツキ収集資料には新しく彼のコレクションのために製作されたものも含まれるが、使用痕があり、既に使われていたものを収集したケースが多い。その場合には**製作者の心の問題（使ってもらう人への愛情？）**も関わるのかもしれない
- **イラクサ繊維使用の問題**。イラクサから繊維を取りだして糸や紐にする技術、それを衣類の縫製糸に使ったり、編んで漁網などを作る技術はアイヌ、ニヴフ、ウイльта、ウリチ、ナーナイなど周辺諸民族と共有する。しかし、それを織機を使って織物にして衣服まで仕立てる技術と文化は**樺太アイヌが北限**で、それより北には広がらない。=その理由は？
- **魚皮文化の普及の問題**。魚皮をなめして衣服に仕立てる文化は**樺太アイヌが南限**で、北海道アイヌには見られない（靴は作る）。また、スタイルが独特であり、ビウスツキも複数収集している（サントペテルブルクとユジノサハリンスク）。
cf. ナーナイ、ウリチ、ニヴフなどの魚皮文化は衣類だけでなく、包み紙や防水カバーのほか、窓の明かり取り（障子紙と同じ）など多彩だが、アイヌの魚皮文化にはそこまでの多様性は見られない。

13

- **絹使用の問題**。サハリンで絹を使用するものが多いのは、樺太アイヌの方が北海道アイヌよりも自律性が高かったことの名残かもしれない（絹が使われているものを中心にして調査した結果でもあるが）
- ビウスツキ収集資料にいわゆる**蝦夷錦を使用した資料が少ない**、あるいは蝦夷錦そのものが収集資料に見られないのも特徴=ロシアのアイヌ関連資料には全体的に蝦夷錦が少ない
⇒ニヴフ、ウリチ、ナーナイなど周辺民族の同時代の博物館資料では蝦夷錦資料がアイヌの場合よりも多い。アムール川流域では先住民の手元にも蝦夷錦の衣類や反物、端切れが少なからず保存されている。
=サンタン交易が幕府直営になる以前（1808年以前）アイヌは蝦夷錦をすぐに松前藩に供出してしまったため？
=サンタン交易が幕府直営とされた後の時代（1808年～1867年）にはアイヌは交易から疎外されたために、蝦夷錦を取り扱えなくなっていたから？
=アイヌの間では竜文が入った衣類を手元に置きたがらない傾向が見られる？

14

- 樺太アイヌの衣類に使われる絹や木綿では中国製、日本製、ロシア製の区別が難しい
=蝦夷錦ではないが、中国製の絹の可能性のある断片も見られる
=木綿にも絹にも日本の型染、絞り染などの染め技法、タテヨコ縞などの織り技法が使われたものが見受けられる
=ロシア製の織物（絹織、毛織、絹）の可能性=例えば、700-227aの下帯の赤の毛織物と紫色の縞子織綿布、裏の格子縞織綿布、サハリン郷土博物館の前掛けの裏など
- **獣毛糸、毛織物の問題**。刀掛け帯（829-406）やアザラシ毛皮上衣（700-162）などで使われていた赤い獣毛糸の由来は不明。恐らく羊か山羊の毛でケンプと呼ばれる粗毛を使った糸（by吉本忍）。
=18世紀に千島で収集された彼方掛け帯にも類赤い赤い獣毛糸が使われていた。これは長崎経由か？
=ビウスツキ収集資料の赤い毛織物（700-227aの下帯の赤い布）などはロシアの衣類の断片の可能性もある
- 北海道で収集された衣装（839-86と839-199）で使われていた赤白のモスリンや黒の綿ピロードは明治以降に日本で生産され、普及した素材と考えられる

15

イヤイライケレ ご清聴ありがとうございました

イイエシカルンテプ『ビウスツキ』
プロニスワフ・ビウスツキ胸像
旧アイヌ民族博物館敷地内にあった
今は博物館敷地の一角に設置されている

1903年に白老を訪れ地元のアイヌと交流するとともに資料収集も行った。



16

ピウスツキが来たころと、その後の樺太アイヌの歩み

田村将人(国立アイヌ民族博物館)

民族名称の多様性

①樺太アイヌ

日本では江戸時代から「カラト」や「カラフト」アイヌ語北海道方言で、カラフト(karapto) 1312人(1944年末、樺太庁調べ)

②サハリンアイヌ

Сахалин/Sakhalin/薩哈唎/薩哈林
満洲語 サハリヤン ウラ アンガ ハダ
sahaliyan (ula) angga hada「アムール川の河口の(対岸の)岩のがけ」という意味

③エンチウ

エンチウ(enciw)自称説

→ 河野広道「墓標の型式より見たるアイヌの諸系統」1931年、河野本道『アイヌ史概説』1996年。ただし、北海道の余市も西エンチウ系として考察されていることに注意。エンチウは和人の前で「アイヌ」の語を使いたくないときに使われる一種の隠語

→ 葛西猛千代「アイヌ民族名」『樺太』3-7、樺太社、1931年

北海道での「ウタリ」という言葉に近い?

アリキリエンチウ アリキリカムイ(半分人間 半分カムイ)→ 口承文芸に表れる半神半人の登場人物を表現する常套句

・現在では、自称として採用する人たちもいる。

④クギ、クイ、クイェ

樺太アイヌと隣り合う諸民族による呼称
ウイルタ、ナーナイ、ウリチなど(ツングース諸語)、ニヴフによる

中国語で「庫頁 kuye 島」(薩哈唎も併記)
世界で、唯一?「アイヌ島」とする国

1264年、1297年 ニヴフが「クギ(アイヌ)が攻めてくる」と元に訴えて、元とアイヌの戦い

1308年、アイヌが元に従う。

1689年ネルチンスク条約

19世紀半ばまで、先住民を媒介するサンタン交易が盛んだった。

1855年日露和親条約。択捉とウルップの間に国境画定。

1858-1860年、アイゲン条約、北京条約。アムール河の露清国境画定(ほぼ現在と同じ)

1855-1875年、日露間でサハリンの領有が問題に。

1868年、カラフト島仮規則。日露雑居=共同領有。

1875年樺太千島交換(ペテルブルグ)条約
サハリンの全島がロシア領に。千島列島全部が日本領に。

1876年、樺太アイヌ841名は宗谷から小樽を経て、対雁(江別市)へ強制移住
対雁では、はじめてのアイヌ学校や製網工場が作られた

1884年、千島アイヌも北千島から南千島のシコタン島へ強制移住

樺太アイヌの強制移住

841人が宗谷へ移住。翌年、対雁へ。日本で初めてのアイヌ学校で学ぶ。上級学校へ進む者もいた。石狩川河口に漁場が割り当てられる。農業も勧められるが、なじまなかった。製網所での労働。(樺太アイヌ史研究会編『対雁の碑』北海道出版企画センター、1992年)

ロシア帝国領での樺太アイヌ

ピウスツキの1904年統計では樺太アイヌ1362人(うち204人は北海道からの帰還者)。しかし、島が流刑地になり、いわば特定の経歴を持つロシア人と接触することになった。脱走囚による強盗、殺人などの事件。

プロニスワフ・ピウスツキ

1887 年、政治犯としてサハリン島に送られた B.ピウスツキ(ポーランド人の民族学者)

1897 年、刑期を終えて、サハリン先住民の言語や文化の調査をおこなった

1902～05 年、軍務知事らの資金によって、樺太アイヌのための学校を作った。教師にはニヴフ男性のインディンのほか、千徳太郎治、トゥイチポ。多くの資料を集めた。

日露戦争とこどもたちの不安

「学校の子供たちはほとんどが親に引き取られた。そのうちの何人かは、万が一のときには親と一緒にいて、共に死にたいともらした。実際、誰しも理性をなくしたように思われる不安な時になっていた。[中略]アイヌの立場は危機的であった。アイヌが日本人に対して非常な共感を持っていることを、皆は知っていたから、サハリン占領の時が近づくにしたがって、敵の侵攻が望ましく、また、いずれにしても危険ではない人びとに対する憎悪はますます深まった」(荻原眞子訳「B.ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6、2000 年)

ロシア政府から建網漁場を貸し付けられていたモニタハノの不满(日露戦争後)

「千徳太郎治らと月 40 円でロシア軍の通訳をしていたが、裏では日本人の“片割れ”として日本軍の勝利を望んでいた。だが、戦後、我われの漁場は入札によって和人のものになってしまった。ロシア領時代は“放漫”なやり方でも都合が良かったのに」※概要(葛西猛千代『樺太土人研究資料』1928 年)

1905 年、日露講和(ポーツマス)条約。～1907 年 3 月樺太民政署。北緯 50 度以南が日本に割譲される。1890 年頃から 1906 年にかけて大部分がサハリンに帰還

1933 年、樺太アイヌは、全員日本の戸籍に編入。ただし、ウイльта、ニヴフは無籍のまま→日ソ間でスパイとして利用された。

1908 年頃から、樺太庁は先住民族を約 10 か所に集住化。人工的な村落造成、家屋の支給、学校の設置、「土人指導員」の配置。北海道旧土人保護法は施行されず。「土人漁場」という漁場からの収益を先住民政策費に充てた。

サケマスの捕獲は制限付で「許可」⇔北海道アイヌへの対策と違う点。

沿岸には「土人漁場」と称する定置漁場を設置してその収益を先住民政策の費用にする(当初は、大規模漁業家に運営を託す。後に、先住民族が経営したか)

安部洋子『オホーツクの灯り～樺太、先祖からの村に生まれて～』2015 年、クルーズ

樺太アイヌにとっての戦後

1945 年 8 月、ソ連軍が侵攻。

1949 年にかけて、樺太アイヌ約 1200 人、ウイльта・ニヴフ約 60 人?が北海道へ(引揚げ)。千島アイヌも、同様に根室地方に移住。

サハリン先住民(樺太アイヌ、ウイльта、ニヴフ)はなぜ(引揚げ)たのか?

理由1) 日本の国民になっていたという自覚

理由2) 徴兵されていた/「シベリア抑留」されていた家族がサハリンに戻れなかった

理由3) 反共政策・日ソ戦争を経て、ソ連政府への嫌悪感

この結果、北海道ほか各地に移住・離散

まとめ

長い間、中国、ロシア、日本などの巨大な軍事力、経済力を持った国家間で翻弄されてきたその中であっても、サンタン交易や、独自の文化や技術を活かせる機会があった

しかし、日露で国境紛争がはじまってから、とくに日本領になってからの“同化政策”によって、生活は(日本化)した。